

幼児生活団幼稚園

幼児期における初めての集団生活で得る体験

栗原 美枝子

家庭で過ごしてきた時期から初めて同年齢の集団生活が始まる（保育園に通っていた園児もいるが、幼稚園での集団生活は初めて）。子ども達が、様々な経験を通して徐々に幼稚園生活に慣れ、自分を思い思いに表現できるよう、幼稚園が安心できる場所であるように、日々教職員は子ども達と向き合ってきた。5月からコロナが「5 類感染症」に引き下げられ、本来の人と人との繋がりを大事にした保育カリキュラムに近づいた 1 年であった。

I. 笑顔あふれる挨拶

コロナ禍ではマスクで顔半部が覆われて、表情が読み取ることの出来ない状態が続いていたが、子ども達はマスク無しでの生活を送ることが出来るようになった。毎朝の挨拶では大きな声で「おはよう」と挨拶をする子、親の後ろに隠れながらも恥ずかしそうな表情で先生の方を覗き込みながら挨拶をしてくる子、日々のちょっとした表情の違いにも私達教職員は気づき、言葉を交わさなくてもその子の思いに近づいて保育を始められるようになった。

保護者の方々もマスクを外していらっしゃる方が増え、子ども達と同様に表情を読み取ることが出来るようになったので、面談や日々の登降園でのお話も相手の気持ちを汲みながらコミュニケーションをとることが出来、コロナ禍での孤立感が多少和らいだように感じる。

子ども達も相手の表情を見ながら、次の言葉を選んで会話を続ける姿も見られるようになった。また一見わがままにうつるが、自分の感情をぶつけ泣きながら思いを吐き出す場面も多くなったように思う。マスクをしていた時は、内面に秘めてしまい家庭に帰ってから爆発するなど、子ども達にとってもどのように表現すればよいのかわからないで日々過ごしていたのかもしれない。本来の幼児が抱える思いをそれぞれの表現の仕方を出すことの出来る生活に戻ってきた。

II. 異年齢交流

3 学年の交流は一緒にお散歩へ出かけたり、お食事を一緒にいただく、園庭での自由遊びではクラス関係なく興味関心のある遊びの中で自然にクラスの壁を越えて交流している。かるがも預かりでは、降園まで一緒のカリキュラムな

ので日中の保育以上に関わりを持って過ごしている。そのような環境で過ごしていると、自然に大きい子が小さい子のめんどろを優しく見たり、小さい子が大きい子への憧れをもって少し難しいことへも挑戦する気持ちが芽生えたりと互いに良い影響を受けている。大人が教えることではなく、子ども達の置かれている環境の中で育つものである。

一貫校である自由学園の幼児生活団幼稚園。学園キャンパスに出かけると他部の学生に会うことが多くある。6 才組の子ども達は幼稚園では一番大きいクラスであるが、初等部へ行くと自分よりも大きい生徒がたくさんいて、憧れのまなざしで観察している。1 年生と 6 才組の交流では、一緒にゲームをしたり、初等部の教室に入らせてもらい席に座って先生の話聞く機会もあった。

また男子部中 3 との体育授業では、バスケのやり方を教えてもらったが、お互いごちなく始まり、少しずつ小さい子にシュートを入れられるように様々な対策を考え、背の高い生徒がおんぶしたり 2、3 人で抱きかかえたり、と時間がたつにつれてどんどん活動が広がってきた。



男子部中 3 との体育授業。

園児が年上の子に刺激されて影響を受けるだけではなく、中等科生が年下の子の動きや言葉などで刺激をもらい発見することもあるのも、一貫校の異年齢交流でなくては経験できないことである。

技術、家庭の授業「幼児の姿、成長」で、実際に子ども達の生活を見に来た中学の生徒とも仲良く遊びこんだり、学部生は、幼児の運動能力を考えて遊びコーナーを作って一緒に身体を動かして遊ぶ機会を作ってくれた。普段の遊びより少し難しい遊びコーナーを準備してくれたので、子ども達は遊びながら挑戦をして、達成感を自然に感じられるような交流となった。



最高学部生との交流。

Ⅲ. 食事

幼児にとって食事は身体を作っていくうえで重要であり、食べることが楽しいと感じる(体験)大事な時間である。4才組は初めて幼稚園のお食事をいただくが、喜んで完食する子、普段食べたことのない献立でじっと見つめるだけの子、一口だけ食べて終わらせる子、いろいろな表情を見せてくれる。「おいしいね」「たべてみよう」と自分から進んで食べ進められるように、時間はかかるが一緒に大人も食べながら見守っている。子どもたち同士でも「これおいしいよ」

「ぼくの大好物」と言いながら、食べない友達を不思議そうに見つめている姿も見られる。そんな言葉に誘われて一口食べて、いつの間にか食べられるようになることもある。これらも集団生活ならではの体験である。

ルールを守りながら(姿勢よく食べる、口に物が入っているときはしゃべらない等)友達の様子を見て楽しく食べ進めるお食事の時間となってきた。

ホールで5, 6才組が一緒に食べ、4才組は保育室で食べているが、来年度はホールで3クラスと一緒に食べられるように環境を整えていきたい。盛り付けもコロナ以前のように5, 6才組は自分達で盛り付けが出来るようにしていきたい。

Ⅳ. 遊び

幼児にとって遊びは学びである。私たち教職員はその遊びをどのように展開して発展させていくのかを見通しながら環境を設定し子どもへの声掛けをしていく。

園庭での遊びがダイナミックになってきた1年であった。砂場では裸足になり高い山を作り、川を掘ってみんなで水運びをして大きな水たまり(海)を作り、体中泥んこになっている。山を崩してもう一度高い山を作ったり、水を流すタイミングなどは、一人だけの考えで進めていくことは出来ない。自分の考えを伝え、相手の思いも聞いて友達の見解を受け入れるのか、それとも自分の考えを突き通すのか。どの子ども達も頭をフル回転させながら遊びに夢中である。この体験を一つでも多く子ども達に経験していただきたい。一人遊びとは違うのである。ただ遊んでいるだけではない。子ども達の遊びには

「やってみたい」 好奇心

「どうしたらいいのかな」 創造力

「うまくいかないから次はこうしてみよう」 挑戦

「こんなふうにしてみたらどうか」 コミュニケーション

これらすべてが含まれているので、決まったカリキュラム(音楽や英語など)を一日の保育の中に取り入れつつも、教職員自身がゆとりを持ちながら子ども達に関わるよう環境を整えていく必要がある。

今年は幼児にとって必要な集団での関わりについて向き合ってきた1年であった。本来、幼児にとって安心した場所や思いきり遊び、自分自身を表現できる場とはどのようなものなのか。そしてどのような関わりや声かけが必要となるのか、引き続き教職員で振り返りながら進めていく。